# 『舞姫』と教科書

## ――定番教材『舞姫』を学校現場で読み続けるために

伊藤誠子

### 一　はじめに――「定番教材」とは何か――

高等学校の国語科の教科書には、複数の出版社の教科書で継続的に取り上げられている教材が存在する。「現代文」や「国語総合」の現代文分野で扱われる小説教材のうち、特に『羅生門』・『山月記』・『こころ』・『舞姫』などは、何年にも渡って複数の教科書に採録されており、「定番教材」と呼ばれている。

「定番教材」は、教科書の中で置かれる位置もある程度決まっている。例えば、阿武泉によれば、平成一九年度から「『国語総合』用のすべての教科書がこれを掲載」しているという芥川龍之介の『羅生門』は、教科書冒頭の随想に続いて最初の小説教材として配置されることが多い。これは『羅生門』が、視覚的な表現にすぐれ、比喩が効果的に用いられていることなどから、生徒に小説の読み方そのものを学ばせることのできる教材だと考えられているためであろう。[1]

他の「定番教材」も、学年や学期毎の区切りを意識して配されている。例えば「現代文」の教科書では、目次どおりに授業を行った場合、二年の前後半で『山月記』と『こころ』を、三年で『舞姫』を扱う配置となっていることが多い。そして、「国語総合」の『羅生門』から「現代文」の『舞姫』に到る「定番教材」の順序は、どの出版社の教科書でも変わらず、高等学校三年間の現代文分野の授業における小説教材の基本ラインを形成していると言える。

教材の定番化が進んできた理由として、石原千秋は教員の多忙化により教材研究に当てられる時間が減っていることを挙げている。[2] また、同じ教材に対して年度ごとに様々なアプローチを試みることができる点、教材研究の深化が期待できる点などで、定番化が積極的に支持されてきた側面もあったと思われる。だが清水良典は、「定番化」の一方で多くの教材が「定番教材」に席を譲って消えていき、教科書が均質化してしまうなどの問題点を指摘している。[3]

では、これら「定番教材」は、どのような経緯をたどって定番化したのであろうか。なぜ特定の小説作品が各社の教科書に教材として広く採録されるようになったのか、そこにはどのような理由が存在するのか、森鷗外の『舞姫』をとおして考えてみたい。

『舞姫』は、「現代文」の教科書では多くは後半に配置されており、目次どおりならば三年の二学期以降の授業で扱うことになる。大学入試を控えた時期に、かなりの分量のある文語体の小説教材は授業

では取り上げにくいと考えるむきもあるのではなかろうか。『舞姫』を採録した教科書を使用するすべての高等学校で『舞姫』が授業されているとは考えにくい。にもかかわらず、『舞姫』の採録が続くのはなぜか。『舞姫』について考察することで、教材が定番化していく経緯とその問題点を浮き彫りにすることができるのではないかと考えた。

## 二　『舞姫』の成立因――戦後の研究の歴史をたどる――

一九八二年発行の雑誌「國文學」第二七巻第一〇号に掲載された重松泰雄の「『舞姫』諸説集成」[4]は、この年までの『舞姫』研究の流れが整理されている。また、一九九八年発行の雑誌「國文學」第四三巻第一号の特集「森鷗外を読むための研究事典」では、山田有策が「舞姫」[5]の項でその後の研究の進展をまとめている。これらの的確な整理に従って、戦後の『舞姫』研究の流れをおさえておきたい。

『舞姫』は鷗外の自伝的要素を含むため、戦後の『舞姫』論には、まず鷗外の実生活との関わりの中に成立因を見出そうとする流れがあった。そこでは鷗外が『舞姫』を執筆した動機として、ドイツから鷗外を追ってきた女性に対する贖罪の気持ちや鷗外の後悔、さらに母の峰子や最初の妻である登志子への反発のためとする論[6]、逆に森家への帰属表明とする論[7]などが現れた。また、ドイツ人女性の件は既に解決済みだということを軍部に示すための作品だと解釈する論[8]考もあった。

このように『舞姫』は、鷗外が自身の心を慰めるために書いたものでもあり、同時に周囲の人々へ何らかのメッセージを伝えるために書かれた「実用的」な面も持つ多義的な作品だと見なされてきた。

昭和四〇年代から五〇年代にかけては、鷗外の上官である石黒忠悳の日記や西周の日記、さらに鷗外の妹喜美子の夫で、来日したドイツ人女性の説得に当たった小金井良精の日記などが掘り起こされるなど、新たな資料が公表された時期だった。これらによりドイツ人女性の帰国までの経緯や、『舞姫』執筆当時、鷗外が医学界や家庭内で置かれていた状況が明らかになった。これら新資料の発見は『舞姫』研究の進展に大きく影響した。中でも、鷗外が上官の石黒を含む医学界の長老と対立し、「東京医事新誌」の主筆の座を追われた時期と『舞姫』執筆時期が重なることから、この作品は上層部への反逆の意図を込めた挑戦的な作品だとする磯貝英夫[9]や竹盛天雄[10]らの論が説得力を持った。また、田中実は西周の日記の鷗外に関する記述をたどり、鷗外の、妻登志子とその実家の赤松家への反発を『舞姫』執筆の背景に読みとった[11]。

このような、『舞姫』の自伝的要素に着目する流れがある一方で、昭和五〇年代からはそれとは切り離して作品そのものをつぶさに読もうとする研究の流れが生じた。文学研究の世界に、作家の自伝的要素と作品とを切り離して作品自体を読み込もうとする「作品論」の方法が擡頭してきたのは昭和四〇年代からである。山田有策の研究史の整理によれば、自伝的要素の強い『舞姫』は、この「作品論」を試みるのに絶好の対象だったという。『舞姫』に描かれたベルリンの都市空間の意味を解読する前田愛の論考[12]や、一人称の回想記という『舞姫』の構造に着目した亀井秀雄[13]や小森陽一[14]らの論考が注目された。

また、『舞姫』以前に書かれた作品、『舞姫』と同時期に書かれた

作品などから『舞姫』のモティーフを探ろうという動きも活発化した。[15]さらに、テキストそのものに即して『舞姫』を読み込んでいこうとする動き[16]も試みられた。しかし、『舞姫』に鷗外の実生活が反映されていることは事実であり、『舞姫』研究において作品と鷗外の人生とを切り離し難いことは否定できない。

## 三　国語教科書の中の『舞姫』

『舞姫』は、現在は高等学校二、三年生で履修する「現代文」の教科書に採録されている。ほとんどの教科書出版社で難易度等の異なる複数の「現代文」の教科書を発行しているが、その中で少なくとも一種類の教科書に『舞姫』が掲載されているのだ。

森鷗外の作品は、戦前の中学校や女学校で用いられた教科書でも歴史小説や詩歌が教材として採録されてきた。[17]しかし、『舞姫』が教科書に採録されるのは、昭和三〇年代からである。高橋修によれば、この当時『舞姫』には、「近代文学」派の唱えた「近代的自我の確立」に基づき、「近代的自我の挫折」という読みの枠組みが付与され、「国民文学論」の立場からは、日本固有の近代化の問題が描かれている作品と見なされた。高橋は『舞姫』の教科書への採録に関して、両方の立場から支持されうる作品であったことを指摘している。[18]

さらに、一九六〇年代の社会情勢も『舞姫』採録を後押しした。『舞姫』には国家対個人の構図が描かれているが、同時に無慈悲に引き裂かれる恋人同士の話でもある。佐藤泉は夏目漱石の『こころ』の教科書への採録が進んだ理由として、社会に対する批判勢力になりうる高校生の関心を個人に向けさせる意図があったと見なしているが、[19]『舞姫』の採録にも同様の意図があったと考えられないだろうか。『舞姫』も「恋愛」と「友情」の板挟みになる若者の物語として読めば、「恋愛」に悩む「望ましい」青年のあり方のモデルとなりうる。国家への帰順と批判とが同居する『舞姫』のモティーフの多様さは、どのような立場からも解釈の出来る教材として、教科書への採録の際に効力を発揮したのであろう。

学習指導要領の改訂の面からも、『舞姫』採録の背景を考えてみたい。昭和三五年（昭和三八年度の一学年より実施）の学習指導要領の改訂では、「現代国語」が新設された。明治以降の作品を教材とし、「文語的文体」の作品も教材として含むと学習指導要領に明記された「現代国語」の教科書において、『舞姫』を採録する教科書出版社は徐々に増加する。この時の学習指導要領の解説には、古典に関する科目と「現代国語」との関連に配慮することが留意事項としてあげられており、文語で書かれた明治期の小説への注目が集まったと言えよう。

昭和四五年の学習指導要領改訂では、経済成長を支える人材の育成に重点がおかれた。主人公が立身出世のために帰国するという『舞姫』に描かれた状況は、高度経済成長期の日本においてある意味共感をもって受け止められたのではあるまいか。『舞姫』が書かれた明治二三年は、明治維新という大きな変化から約二〇年、西欧列強に追いつくために日本という国家が背伸びをしていた時代である。一方「現代国語」の教科書への『舞姫』の採録が増加する昭和四〇年代は、戦後二〇年を経て、オリンピックや万国博覧会を成功させ、第二次世界大戦からの復興と経済的な発展を強く海外に印象づけた

時代だと言えよう。『舞姫』の背景となる時代と昭和四〇年代はある種の共通項を持っており、『舞姫』に描かれたエリートの生き方は、昭和四〇年代の高校生にもある程度理解できると考えられたことも、採録が徐々に増えた理由ではなかろうか。

高度経済成長期には、産業構造の変化の中で農業人口は急減し、一方で高等学校への進学率が上昇した。苅谷剛彦は、当時多くの農村出身の若者が、進学をとおして農業以外の仕事に就こうとした動きがあったことを指摘している。[20] 当時の地方農村では、進学を社会的な立場を移動するための手段ととらえる考え方が広がっていたという。感情を押し殺して学識にふさわしい道に立ち戻ろうとする太田豊太郎と、社会的な立場を変えるために学歴を身につけようとする高校生たちとの乖離は、太田豊太郎と現代の高校生との乖離ほどに大きなものではなかったはずだ。高度経済成長期の高校生たちには、『舞姫』や太田豊太郎の生き方を受け入れる素地がある程度備わっていたと考えられる。

昭和五三年の学習指導要領改訂（実施は昭和五七年度の入学生から）では、それまでの教育課程がいわゆる「落ちこぼれ」を生み出したとの反省から、学習内容の精選が重要課題とされた。精選化が進められる際、既に長い教科書採録の歴史を持つ森鷗外の作品は、教科書には欠かすことのできないものだと考えられたはずだ。この学習指導要領改訂により「現代国語」が消え、「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」という現代文分野と古典分野を合わせた科目が誕生した。阿武は、「1[21]冊の教科書に収録できる作品数はおのずから減少する。小説はせいぜい5作品ぐらいしか載せられないため、各時代を代表する作家・作品に採録作品が固定化してくる。」と、この時期に「定番化」が定着したことを指摘している。教科書収録の教材数の減少は「国語Ⅰ・Ⅱ」での傾向だと考えられるが、同様の教材の「精選」意識が「現代文」教科書編集の際に働いた可能性もあるのではないか。

また、『舞姫』研究の上で、前章で見たように昭和四〇年代から五〇年代にかけて新たな発見や斬新な論の発表が相次いだことも、『舞姫』という作品に対する関係者や世間一般の関心を高め、そのことが森鷗外作品の中でも特にこの作品が教科書に取り上げられることにつながったのではなかろうか。

このようにして定番化した『舞姫』をとおして何を教えるか、各教科書出版社はどのように考えているのだろうか。それは教科書の本文の末尾に示される設問（「学習」や「手引」と呼ばれる）を見るのがわかりやすい。平成一八年度使用の「現代文」教科書について、シェア上位の三社と昭和三〇年代から『舞姫』を採録し続けている一社の計四[22]社の設問を比較したところ、「近代的自我の目覚めと挫折」という昭和二〇年代に定着した『舞姫』の読みの枠組みが生き続けている一方で、豊太郎とエリスとの愛のあり方や、豊太郎と相沢の友情のあり方などが考察のポイントとして示されていた。なじみにくい文語体で書かれた小説の中から、現代の高校生の心に訴える力の強い「恋愛」と「友情」を取り出し、可能な限り生徒たち自身に引き付けて考えさせるように配慮していると言えよう。

また、『舞姫』の手記としての形式に着目し、一人称で語ることの意味を考えさせようとする問いを設けた教科書もある。この観点は、『舞姫』を、「近代的自我の目覚めと挫折」の物語として読ませようとする定番的教授法とは全く異なるアプローチの可能性を含んでいる。

「近代的自我の目覚めと挫折」を中心に据えた定番的な読解は、生徒の生活実感から離れ、知識としての『舞姫』理解に止まるおそれがある。また一方で、「恋愛」や「友情」のあり方を問うことは、展開の仕方によっては「正しい恋愛」「正しい友情」という価値観の刷り込みにつながり、望ましい青年期の生き方を考えさせるためだけに『舞姫』を用いる授業となってしまいかねない。このような授業展開を避けるためにも、「定番教材」ではあっても、文学研究の進展の成果を生かした「定番」ではない授業のあり方を模索する必要があると言えよう。

## 四　『舞姫』の授業実践例

各社の現代文の教科書の教師用指導書には、『舞姫』の授業の配当時間案が示されている。例えば昭和四八年に発行され、ほぼ全文を採録した教科書の指導書では、六時間配当とされている。一方、平成一八年度使用教科書の指導書では、十時間から十一時間を標準的な時間として示しているものが多い。

教師用指導書に示されている授業の展開は、まず背景となる「明治」という時代に関する知識を与えた後、段落毎に豊太郎の「自我の目覚め」やエリスとのきずなの深まりなどを理解させていくというパターンが中心である。さらに、最後にまとめとして豊太郎の生き方や考え方について話し合いをさせたり、感想文を書かせたりするように指示している指導書も多い。『舞姫』の主題に関しては、「近代的」という語句こそ省かれているものの、「自我の覚醒と挫折」の物語としているものが多く見られる。昭和五〇年代の『舞姫』研究の展開を取り入れ、前田愛の解釈を主題に取り入れた指導書もあるが、その場合も「自我の覚醒と挫折」を軸とする主題と併記されている。

「定番教材」である『舞姫』には、多くの授業実践の報告が積み重ねられている。中には、一学期の三十九時間の授業を全て『舞姫』の指導にあてた実践[23]や、五人の担当者が合計授業時間数もアプローチもそれぞれ異なる方法で取り組んだという授業実践の報告[24]もある。時間数の多い実践の場合、生徒に分担させて本文の口語訳を完成させるなど、文語体の文章の解釈にある程度の時間をかけている。

「定番」の授業展開からの脱却を試みた例としては、『舞姫』の授業後に『舞姫』に関する研究論文や鷗外の他の作品を読ませることで生徒の読みを発展させようとする実践[25]、アイデンティティに関する評論を授業で読んだ後で『舞姫』の授業を行い、自我の問題について深く考えさせようとする実践[26]などがある。

また、田中実の論考[27]に沿い、一人称の回想記という『舞姫』の形式に着目し、「書く自分」と「書かれる自分」との分離や、「書く自分」の意識が「書かれる自分」を改変していく過程を考えさせようとする実践[28]も報告されている。回想の手記の形式には、正直であろうとしながら、自己弁護に陥ってしまう人間の弱さが表れる。この心の動きに目を向けさせることは、倫理的な題目を教える以上に人間に対する深い理解を生徒たちにもたらすはずである。手記を書くという行為の特性に注目することは、「近代的自我」の目覚めと挫折という枠組みによらない授業展開を考える上で、新たなヒントとなるのではなかろうか。また、作者の鷗外がなぜこのような作品を書かねばならなかったか、作者の意図を考え、「書く」という行為の持

つ意味を考えさせる教材としての可能性を示唆する論[29]もある。このような実践例から、『舞姫』は扱い方によっては現代を生きる生徒にも十分訴えかける内容を持ち、新たな授業展開の可能性を含んだ作品となると言えるだろう。

「定番教材」が三年間の現代文分野の小説教材の基本ラインとなっている現在、『舞姫』で何を教えることができるのか、何を生徒達に考えさせることができるのか常に検証していくことが求められている。

## 五　おわりに

『舞姫』は、当初「近代的自我」の目覚めと挫折を問う作品として昭和三〇年代初頭に高等学校の国語教科書に登場した。また、「現代国語」という科目の誕生により、明治時代の文語体の作品という点からも採録する教科書が増えた。さらに高度成長期時には時代に適合した面もあり、「友情」や「恋愛」を考えさせる教材ともなりうるために『舞姫』の教科書への採録は増加していったと考えられる。一方「精選」を課題とする昭和五三年の学習指導要領の改訂は、漱石や鷗外ら「文豪」と言われる作家の作品を教科書に残すことにつながった。このようにして『舞姫』採録が定着する流れの中で、「近代的自我」の言葉は、その確立を目指す文学史観が文学の場から失われた後も、教師用指導書や教科書掲載の「学習のてびき」などを通して学校現場には残り続け、「定番」的な解釈となっていった。

その結果、その教材をとおして何を教えるかを検証する過程は省かれがちになり、「定番教材」を教えること自体が重要視されるようになる。何をどう教えるべきか、教材価値の検証や授業展開への工夫は行われなくなり、教材の定番化と同時に授業自体も硬直化したものとなっていく。

「定番教材」による授業の硬直化などの問題点は、教材自体にあるというよりそれを扱う教員側にある。『舞姫』については、文学研究の積み重ねもあり、様々な読みの可能性が示唆されている。「定番教材」であっても「定番」の解釈によりかからず、教材価値を検証し授業展開を工夫することが必要である。

### 注

（1）阿武泉「高等学校国語教科書における文学教材の傾向」「國文學」第五三巻第十三号　二〇〇八年九月一〇日　學燈社　三四頁

（2）石原千秋『国語教科書の思想』二〇〇五年一〇月一〇日　筑摩書房　二四頁

（3）清水良典「漱石・鷗外は教科書から消えたか？　問題は定番化求める現場」「朝日新聞」二〇〇二年九月一九日夕刊　二版第一一面

（4）重松泰雄「『舞姫』諸説集成」「國文學」第二七巻第一〇号　一九八二年七月二〇日　學燈社　一二六頁

（5）山田有策「舞姫」「國文學」第四三巻第一号　一九九八年一月一〇日　學燈社　八五頁

（6）岸田美子「舞姫」（『森鷗外小論』一九四七年六月二〇日　至

文堂）や平野謙「藝術と実生活　Ⅱ　森鷗外」（『平野謙全集第二巻』　一九七五年二月二五日　新潮社）、松原純一「森鷗外『舞姫』論」（『相模女子大学紀要』第十一号　一九六一年一〇月三〇日）など。

（7）三好行雄「解説――人と作品――」（三好行雄編『近代文学注釈大系　森鷗外』一九六六年一月二〇日　有精堂）、関良一「『舞姫』鑑賞」（『逍遙・鷗外　考証と試論』　一九七七年一〇月二〇日　有精堂　四一五頁）など。

（8）渋川驍『森鷗外　作家と作品』　一九七〇年九月一〇日　筑摩書房

（9）磯貝英夫「啓蒙思想家時代の森鷗外――その思考特性――（上）」「文学」第四〇巻第十一号　一九七二年十一月一〇日　岩波書店

（10）竹盛天雄「森鷗外『舞姫』――モチーフと形象――」（『高等学校国語科教育研究講座』第三巻　一九八〇年三月　有精堂）や同「石黒・森のベルリン淹留と懐帰をめぐって――緑の眼と白い薔薇――（下）」（「文学」第四四巻第二号　一九七六年二月一〇日　岩波書店）など。

（11）田中実「『舞姫』背景考」　日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書　森鷗外Ⅱ』　一九八六年三月一日　有精堂

（12）前田愛「ベルリン一八八八年――都市小説としての『舞姫』」「文学」一九八〇年九月　岩波書店

（13）亀井秀雄「『舞姫』読解の留意点」（「月刊国語教育」創刊号　一九八一年　八月　東京法令）など

（14）小森陽一「結末からの物語」『文体としての物語』　一九八八年九月一日　筑摩書房

（15）千葉俊二「鷗外全集逸文『クロムウエルの伝』をめぐって――『舞姫』論への一視角」（山梨英和短期大学国文学研究室編『山梨英和短期大学創立十五周年記念　国文学論集』一九八一年一〇月三〇日　笠間書院）や松木博「『盗侠行』論――初期鷗外作品のモチーフ――」（田中実編『日本文学研究資料新集　13　森鷗外・初期作品の世界』一九八七年十一月五日　有精堂）など。

（16）松沢和宏「忘却のメモワール」（「文学」季刊第八巻第三号　一九九七年七月一〇日　岩波書店）など。

（17）橋本暢夫『中等学校国語科教材史研究』　二〇〇二年七月三〇日　渓水社による。

（18）高橋修「『舞姫』から『ダディ』へ／『ダディ』から『舞姫』へ」（「日本文学」第四八巻第四号　一九九九年四月一〇日　日本文学協会）による。

（19）佐藤泉『国語教科書の戦後史』（二〇〇六年五月一五日　勁草書房）による。

（20）苅谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ　学歴主義と平等神話の戦後史』（二〇〇六年一月二〇日　中央公論新社）による。

（21）阿武　前出　四二頁

（22）第一学習社『高等学校現代文』、東京書籍『精選現代文』、大修館書店『精選　現代文』、筑摩書房『精選現代文』の四点。

（23）矢部彰「『舞姫』授業ノート」『森鷗外　教育の視点』　一九九一年一月三〇日　近代文藝社

(24) 京都教育大学附属高等学校国語科「定番教材『舞姫』…五人の教師による五種類の授業」「研究紀要」第七〇巻　二〇〇一年一〇月三一日　京都教育大学

(25) 篠原武志「『舞姫』授業とフォローアップ試論――生徒の「論」を交差させる試み――」「同志社国文学」第六五号　二〇〇六年一二月二〇日　同志社大学国文学会

(26) 竹盛浩二「森鷗外『舞姫』を〈わたし〉の哲学として読む」「Problematique」第五号　二〇〇四年七月三一日「プロブレマティーク」同人

(27) 田中実「多層的意識構造の中の〈劇作者〉」(『小説の力――新しい作品論のために』二〇〇〇年三月一日　大修館書店〉による。

(28) 幸田国広「〈読み方〉指導の再定義――『舞姫』実践の今日的展開――」「日本文学」第五〇巻第八号　二〇〇一年八月一〇日　日本文学協会

(29) 山元隆春「発話行為としてのテクスト『舞姫』の新しい教材性」(田中実・須貝千里編『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ　1　文学研究と国語教育研究の交差』一九九九年二月二五日　右文書院〉による。

なお『舞姫』の教科書への採録状況は、阿武泉氏作成の「戦後高等学校国語教科書データベース」によった。

(いとう・せいこ)